

美術の窓 (150)

仙台祭絵と江戸の錦絵

大和文華館館長 浅野秀剛

私は今、仙台祭絵の研究をしている。昨年5月、美術史学会が東北大学で開催された折、仙台市博物館館長に勧められて、再調査し、論文としてまとめることにしたのである。私が2000年に仙台祭絵についての小論文を書いたことを、旧知の館長が知っていたうえで要請であった。

仙台祭絵とは、江戸時代後期から明治期に仙台で制作された版画で、祭礼時に練り歩いた山鉾類を描いたものをいう。一つの山鉾を大画面(初期のものは50×30cmくらい)に大写しにしたもの(大絵図)と、町内の山鉾をまとめて描いたもの(小絵図)に大別されるが、全部で数百は制作されたと推定される大絵図は、江戸期の祭絵としては最大の一群である。初期の大絵図は、1700年頃に江戸で制作された大々判墨摺絵と同じ大きさであるが、江戸絵とは印象がかなり違う。最も顕著な特徴は、画中に「二日町 寺沢屋」というように、町名と屋号が記されていることである。しかし、そんな大型の版画が100年以上に亘って仙台の地で制作されていたことを知る浮世絵研究者は今でも少なく、それらは欧米の美術館や個人コレクションに、出自不明の日本版画(江戸の鳥居派の版画と間違われることが多い)として扱われてきた歴史がある。

仙台祭絵を分析するに際し、当然ながら江戸の浮世絵版画との関連を意識した。しかし、明確に関連付けられるのは思いのほか少ない。換言すれば、仙台祭絵は作り手の創意がかなり高かったのである。それは、仙台祭の山鉾類の創意が高かったことを意味する。

そうはいつても、江戸の錦絵を参考にしたと思われる作品もいくつか見出すことができたので、今回はそれを紹介してみたい。

「風流井筒之鉢」(図1)は、寛政3年(1791)年の作と確定できる貴重な例である。『伊勢物語』23段で、俗に「筒井筒」と称される場面を当世の男女にやつした作品であり、江戸の浮世絵師、鈴木春信門の鈴木春重(司馬江漢)(図2)や益信、そして鳥居清経のような明和(1764~72)末頃の様式を示している。その点に注目して図像を探すと、春信画「井筒の幼い二人」(中判錦絵、図3)と、桃の枝を折り取ろうとする若い男を描いた春信画「やつし東方朔」(中判錦絵2枚続の右、図4)を参考にした可能性が浮上する。

「野見宿禰当麻蹶速すまふノ始り」(図5)は、初期の大型の作品中、唯一画中に暖簾印が入っているため、「風流井筒之鉢」よりは後の時代のものと推定される作品。この図で興味深い

のは、下部に描かれている野見宿禰と当麻蹶速の図像が、江戸の勝川春章の中判錦絵「三代目大谷広次の河津三郎と二代目中村助五郎の股野五郎」(明和7年[1770]11月市村座顔見世「女夫菊伊豆着綿」に取材、図6)を参考にしたと考えられることである。

「狂言仕掛狐忠信之鉢」(図7)は、前記2作品よりやや小さく、寛政(1789~1801)末から文化(1804~18)頃の作品である。「狂言仕掛」は歌舞伎主題の意味であり、「狐忠信」は、『義経千本桜』の四段目を指す。この図は、天明4年(1784)7月に江戸の中村座上演の『義経千本桜』に取材した、鳥居清長画「五代目市川團十郎の横川学範、三代目沢村宗十郎の源九郎狐、瀬川富三郎の静御前」(大判錦絵、図8)に図像が極似しているため、その清長画の錦絵の影響下に制作されたと考えてよいであろう。

寛政から文化にかけて制作された仙台祭絵の一部が、江戸の錦絵、しかも明和(1764~72)から天明(1781~89)に制作刊行された作品の影響

下にあるということは、その頃の仙台祭の図像の何パーセントかは、江戸の浮世絵の影響を受けていたことを物語る。その後の仙台祭絵は、江戸の影響を脱して、独自の図像を確立するとともに、類型化の道を進んでいくことになる。

※図2は『大和文華 26号』、図3は『浮世絵 海の見える杜美術館館蔵選3』、図4は『ボストン美術館浮世絵名品展 鈴木春信』、図6は『大和文華 126号』より複写。

126



図1 ホノルル美術館蔵



図2 鈴木春重「五常智」



図3 海の見える杜美術館蔵



図4 ボストン美術館蔵



図5 仙台市博物館蔵



図6 ボストン美術館蔵



図7 千葉市美術館蔵



図8 個人蔵

季刊 美のたより No.208

令和元年 10月 2日

発行 大和文華館